

この論稿は、熊本聖書フォーラムでの学びの中で出された質問に対する回答です。主要な内容は、フルクテンバウム博士の「The Footsteps of Messiah」394 頁から 396 頁に依拠します。作成日は、2022 年 2 月 26 日です。

質問①、

教会の信者は千年王国でどのような地位につくのですか。ルカ 19 章 11 節から 27 節にある「ミナのたとえ話」では、キリストの弟子の中から、10 の町々を支配するようになる者や、5 つの町々を支配する者があることが教えられていますが、それは、私たち、教会の異邦人信者にあてはまるのですか？

回答①、

教会の異邦人信者は、千年王国では、キリストと共同統治者になります。ミナのたとえ話での「町々の支配者」ではありません。

説明①、

1. 黙示録 20 章 4 節は、キリストと共同統治者になる人々について、次のように記しています。訳は、American Standard Version に拠ります。

そして、私は座（複数形）を見た。それらの上には座っている人々がいた。彼らにはさばきが与えられた。

そして、私は人々のたましいを見た。彼らは、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々である。

そして、また（人々のたましいを）見た。彼らは、獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けなかった人々である。

そして、彼らは生きた。そしてキリストと共に千年間治めた。

ここには、3 種類のグループの人々がいます。

第一のグループは、「さばきが与えられて座に座っている人々」。さばきとは、「キリストの裁き」（第二コリント 5 章 10 節、第一コリント 3 章 11 節から 15 節）のことです。この裁きは、教会の信者たちの働きを評価して褒賞を与えるためです。救いを受ける、受けない、というような裁きではありません。教会の信者たちは、この裁きの前に復活・変換されて栄光のからだを受けています。

第二のグループは、大患難期前半での殉教者たち。彼らを殉教死に至らせるのは、前半期でバビロンに本部を置く世界統一宗教です。

第三のグループは、大患難期後半での殉教者たちです。彼らを殉教死に至らせるのは、後半の世界支配者である「けもの」、すなわち反キリストです。

黙示録を書いた使徒ヨハネは、将来起きる大患難期での状況を幻として見えています。殉教者たちが復活するのは大患難期が終わってからなので、第二と第三のグループの人々について、ヨハネは、その人々の「たましい」を見た、と記しています。

「たましい」というのは、幽霊のようなものではありません。死者の霊魂です。体は土に帰りますが、霊魂は意識を持ち続けます。そして、からだのように見える輪郭を備え、服を着た状態で見えます。それが「たましい」です。

使徒ヨハネが見た殉教者たちは、全員が異邦人信者です。なぜなら、大患難期において信者になるべきユダヤ人は全員、大患難期を生き残り、大患難期の末期にその全員がイエスをメシアであると信じて救われる、と預言されているからです。

以上の3つのグループ全体を指して、二重下線のところ、「彼ら」です。3種類のグループ全員が生きて、千年間、キリストと共同統治者になります。

なお、新改訳 2017 では「生きて」ではなく、「生き返って」と訳されていますが、原文は「生きた」です。第一のグループである教会の信者たちはすでに復活・変換により栄光のからだを受けていますから、「生き返る」ということばは使われていないのです。

2. 聖書預言をまとめると、千年王国における統治体制は、次のようになります。

世界全体の王がキリストです。

この下に、ユダヤ人部門と異邦人部門の支配者が着きます。

ユダヤ人部門は、ダビデ王です。十二人の使徒たちは、ダビデ王の下で、十二の部族を支配します。

異邦人部門は、教会の信者たちと大患難期の殉教者たち（黙示録 20 章 4 節）です。もちろん、教会の信者でも、ユダヤ人信者はユダヤ人部門の中に入ります。

3. 詩篇 72 篇 10 節～11 節では、千年王国において、諸国の王たちが登場します。諸国の王たちと諸国民は、教会の信者や大患難期の殉教者たちではありません。大患難期を生き延びた異邦人信者たちです。彼らは、普通の肉体をもって千年王国に入ります。
4. ルカ 19 章の「ミナのたとえ話」について説明します。

この話は、取税人ザアカイの救いの次に、語られるたとえ話です。「この家に救いが来た」とイエスが宣言すると、まわりのユダヤ人たちは、メシアの王国がすぐにも来る、と連想します。しかし、イスラエルの指導者たちがイエスをメシアではないと拒否したので、メシアの王国は、その時の世代のイスラエルからは取り去られ、将来の世代を待つことになります。

このたとえ話の中心ポイントは、第一にメシアの王国はすぐには来ないこと、第二に、それまでの間、メシアの弟子たちはどのように生きるべきか、この 2 点を教えています。話の中では、「悪いしもべ」が登場します。イエスのまわりにいた弟子たちの中には、イエスを信じていないユダのような弟子もいました。そのことを前提に読むべき箇所です。

さて、このたとえ話の中で、良いしもべは、その働きに応じて、10 の町々、あるいは 5 つの町々を治めるようになります。このことを、教会の異邦人信者である私たちにも適用することができるのでしょうか。

このたとえ話が語られているのは、ユダヤ人たちに向けてです。10 の町々、あるいは 5 つの町々を治めなさいと言われて、ユダヤ人たちが、その町々を、約束の地以外の外国の町々として想定することは、あり得ません。

そもそも、メシアの王国とは、約束の地にイスラエルが帰還し、アブラハム契約の土地の約束が成就する、ということなのです。そして異邦人諸国がイスラエルを圧迫することなく、逆にイスラエルの王であるメシアが、平和と正義をもって全世界を支配するというのが、メシアの王国です。

アブラハム契約は、イスラエル民族に与えられた神の約束です。土地の約束、子孫の約束、そして祝福の約束の 3 つの重要な約束を含んでいます。異邦人信者がアブラハム契約にあずかるとき、それは土地の約束や子孫の約束とは関係ありません。異邦人信者には霊的な祝福の約束だけが関係することに留意すると、「ミナのたとえ話」は、ユダヤ人に向けられたものと考えてるのが、よいでしょう。

ミナのたとえ話と似ている、マタイ 25 章 14 節から 30 節の「タラントのたとえ話」も、よく、現代の教会の信者である私たちに関係があるかのように誤解されます。

こちらは、大患難期における異邦人たちに向けられた内容です。話の内容は「ミナのたとえ話」とよく似ていますが、褒賞は「町々を与える」ではなく、「多くの物をまかせよう。主人の喜びをともに喜んでくれ」とあり、霊的祝福に重きが置かれています。

そして、「悪い、怠け者のしもべ」、「役に立たないしもべ」は、外の暗闇に追い出されます。彼らは信者ではありません。大患難期において明確なしるしを伴う福音宣教を受けながら、神の救いを受け取らず、その結果、神のみこころに沿った働きができなかった不信者です。

マタイ 25 章は、1 節から 13 節で、「十人の娘のたとえ話」、そして 14 節から 30 節の「タラントのたとえ話」と続きます。これら 2 つのたとえ話はいずれも、大患難期における異邦人に向けて語られているたとえ話です。そして次の、31 節から 46 節の「諸国民の裁き」の預言へとつながります。この裁きは、大患難期を生き延びた異邦人たちが、信者と不信者とに区分される裁きです。マタイ 25 章は、現代の教会の信者に対して語られている内容ではありません。このことに注意しましょう。

質問②、

「教会の信者は、千年王国では、キリストと共同統治者になる」とのことでした。共同統治者とは、具体的にどのようなことをするのでしょうか？

回答②、

キリストと共同統治者ですから、キリストの王としての働きと同じと考えられます。

キリストの王としての働きは、イザヤ 2 章 2 節から 4 節に預言されているように、メシアの王国における法令を発し、それを教え、違反や争いが起きれば公正な裁きを行うことです。

キリストから発せられた法令を、異邦人部門の統治者である私たちが受け取り、それを、配下の王たちを通して諸国民に伝え、指導し、公正な裁きを行うことが、千年王国における私たちの使命となるでしょう。

説明②、

イザヤ 2 章 2 節から 4 節には、次のように預言されています。

**終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘よりも高くそびえ立つ。
そこにすべての国々が流れて来る。多くの民族が来て言う。**

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。」

それは、シオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。

主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。

彼らがその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。

「終わりの日」とは、メシアの初臨から始まり、メシアの王国が終わるまでの期間を指します。「主の家の山」とは、主の神殿が立つ山、エルサレムを指します。大患難期の末期に大きな地震が起きて地形が激変し、エルサレムが世界で最も標高の高い地点になると預言されています。

エルサレムには世界中から人々がやって来て、主の教え、主のことばに耳を傾けます。この教えとは、単に宗教的、道徳的な教えではなく、メシアの王国時代の法令であり、人々の生活指針となります。

そして、国々の間に争いが生じると、主は「国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す」とあるように、その紛争を公正に裁き、世界の平和と正義を保ちます。そのため、国々は、もはや軍備を持つ必要はありません。戦争は起きませんし、軍事訓練を国民に課することもなくなります。

法令の発布、法令の指導、法令に基づく公正かつ実効的な裁き、これらによる世界平和と正義の保持、これがキリストの統治です。そして教会の異邦人信者たちは、キリストの共同統治者として異邦人部門のトップに立ちます。

その配下には、異邦人の王たちと諸国民です。かれらは、大患難期を生き延び、自然のからだをもってメシアの王国に入ってきた異邦人信者たちです。信者ですから神の恵みによって信仰を通して救われ、聖霊の内住を受けている信者です。しかし、罪の性質は残っています。その点では、彼らは今の私たちと同じです。

このことは、千年王国がエデンの園とは違う重要な点です。エデンの園ではアダムとエバは、サタンの誘惑を受けるまでは罪なき者でした。しかし、千年王国では、異邦人の王たちと諸国民は、確かにメシアの王国が開始するときの第一世代は皆、信者ですが、罪の性質を持っています。

そして、彼らから生まれる第二世代以降は、やはり罪の性質をもって生まれてきます。そして100歳になるまでに信者にならなければ、死にます（イザヤ 65 章 20 節）。他方、信者になれば、千年王国が終わるまで生き、それまでのどこかの時点で栄光のからだに変換されます。そのとき、罪の性質は無くなります。

よって、千年王国の期間中、成人に達してなお不信者という人々は、異邦人部門では、すくなく存在するでしょう。そのため、異邦人諸国の中では民族単位でキリストに反抗する事件が起きると、預言されています（ゼカリヤ 14 章 17 節から 19 節）。そして、千年王国の末期には、不信者が一斉に蜂起してエルサレムを包囲することになり、千年王国は終了します（黙示録 20 章 7 節から 9 節）。

このように、千年王国は、罪の性質と死が、まだ存在する時代です。その中で、メシアが発する法令に基づいて人々を指導し、統治する責任を負うのが、キリストの共同統治者である私たちです。